



# A L P S CAREER

＜シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第39回＞

## 公務員的 プロボノ活動で 仕事にプラス

——景観まちづくりのススメ

はつめこ

今までの自治体職員人生、あえてキャリアデザインを意識して自己研鑽や能力開発に取組んだという意識はありません。しかし「市役所の仕事は果てしなき改善の仕事」という目的意識のもと、担当する職務が少しでも良い方向に「改善」するよう意識し、自治体職員としての自分の役割やミッションを探してきました。その結果、幸運にも充実した日々を過ごせていると思っております。それでは、この充実感の源泉とは何なのでしょう。この機会に、自らの自治体職員としての歩みを振り返りながら、自らの成長の足跡を辿ってみたいと思います。

ガメツイ資格取得

栗東町役場（当時）に事務職として入庁

18年になります。おもに事業系の部署に配属されていますが、入庁した頃は定期的な人事異動に不安を感じていました。いくらか熱意をもって職務に励んでも全く異なる分野に異動したら振り出しに戻ってしまう。いつまでも一人前にならない、という危機感をもっていました。このため、担当した職務を通じて学んだ知識を何らかの形にして自信をつけたい。そんな動機で、担当した職務の資格取得は常に意識してきました。つまり、自分自身が歩んできたマイルストーンとして、ガメツイ程に資格を取得するよう心がけていました。あえて「ガメツイ」と表現したのは、職務を通じて大なり小なりの知識を身につけるのは当たり前前のことですが、私の場合は「せっかく学んだものは形にしないと損」という意識があったからです。



竹山 和弘

栗東市建設部都市計画課

【たけやま かずひろ】1972年、大阪府高槻市に生まれ、滋賀県栗東市に在住。1995年、栗東町役場に入庁し、都市計画課、水道課、周辺整備課を経て、現職に至る。2007年、京都橘大学大学院に社会人入学。栗東市街道百年ファンクラブ、TEAM街道知部（みちしるべ）では事務局長を務める傍ら、観音寺天水クラブ、A+Plus（エイプラス）、栗東市職員まちづくり研究グループ「くりつく」などを発起し、「景観」を切り口としたまちづくり活動に奔走している。

一方、今から思えば資格取得が目的化し過ぎていました。資格を取って仕事に活かすという目的意識よりも、資格を取って自信を得るための自己満足だったのです。とはいっても、資格取得自体を否定するわけではありません。資格を取得しておくことは、異動した後でも活かせる場面が出てきたり、対人関係でも自分をPRするツールには確実にあります。

住民参加・住民自治を体感

平成17年、私にとつての大きな転機が訪れます。当時、都市計画マスタープランの策定を担当し、住民参加による計画づくりに取組んでいました。とはいえ、住民参加の必要性が求められる一般的な潮流に乗っただけのことで、恥ずかしながら当時は、まだ住民参加や住民自治の大切さをしっか

まちの活性化に取り組む「A+Plus」では  
高校生を交えてワークショップをすることも



「ぜさいや物語プロジェクト」では、  
千人彫りで看板のレプリカを作製しました



りと理解していませんでした。

実際に地域に出向き、住民参加型ワークショップによるまちづくり意見交換会の現場を体験しました。「地域のことは地域の人に聞け。」この言葉のとおり、実に興味深い意見交換を聴くことができました。住民自らが地域への誇りや愛着、夢や希望を語り合い、建設的でユーモアあふれるアイデアが続出したのです。こうして住

民パワーを体感するなかで、自治体職員として「熱意」では負けていけないと感じました。そして気がつけば、一個人として描いていた「まち」に向けた夢や希望・アイデアを、フラットな関係で発言してしまいました。

あえて「フラット」な関係と表現したのは、住民と職員の間には不思議な壁があつてフラットな関係でないことに違和感をもっていたからです。しかし、自分自身が一歩踏み込んでみることで、その壁は感じなくなると気づきました。「子や孫たちのために少しでも素晴らしいまちを創りたい」という想いは、本来、住民も職員も同一の方向にあるはずですから当然といえば当然でしょう。むしろ、不思議な壁があること自体が不自然であり、不健全な状態なのかもしれません。

### 政策転換から大学院進学へ

こうして住民と自治体職員の協働の意義を肌で感じ、まちづくりの素晴らしさに関心をもち始めた平成18年、市の一大プロジェクトであつた新幹線新駅建設事業が、滋賀県知事選挙をきっかけとして政策転換が迫られ、その是非をめぐる議論は全国的なニュースとして連日報道に取り上げられました。これが市のあらゆる施策にも影響し、担当する都市計画マスタープランも、素案が完成した段階にもかかわらず公表できないという事態に陥りました。この策定プロセスでは多くの住民参加を得ながら、想い

を込めて作業を進めてきたものです。どうすれば公表することができるだろうか、なぜ、このような事態に陥ったのか、途方に暮れていました。

そんな矢先、計画書策定にあたり学識者としてお世話になっていた大学教授から、政策転換が生じたまちで起こった事象を一つの教訓として論文にまとめる意義と責務、更にはこれからの自治体では「まちづくり」の専門的知識を身につける人材育成が必要としたうえで、社会人大学院への入学を勧められました。かねてからのまちづくりへの興味や関心、政策転換を通じたまちづくりの研究など、入学する動機は十分に揃っていたため、社会人大学院に入学することを決意しました。

大学院では、実際に仕事に直結する理論や最新事例などの知見を得るほか、志の高い学識者や大学院生との出会いがありました。市役所という小さな枠組みを飛び出すことで、見える世界が大きく広がりました。今なお在学中であり、職務やまちづくり活動の傍ら論文執筆に取り組む日々であり、「二束の草鞋」の大変さはありますが、それ以上に充実したものを得ています。なぜなら、職務やまちづくり活動を通じて得た知見や事例を学術論文として研究しながら、大学院で学んだ理論や参考となる事例などを自ら関わる地域まちづくりに活かすことができる、という社会人であり研究者である強みがあるからです。



## 「景観」の明確化

大学院に通い始めたころ担当した職務が景観政策でした。当時、大幅な政策転換を受けつつも、風格都市づくりを目指し、景観によるまちづくりに着手しようとしていました。「風格とは何か」——景観計画を策定する委員会における最初の論点でした。熱心な議論を積み重ねた結果、「わがまちに誇りと愛着をもつ市民があふれる姿」を「風格」と定義しました。そして、今はその風格が不十分であることを真摯に受け止め、百年という長い年月をかけ継続的に取り組む必要性を共有し、名称も「百年先のあなたに手渡す栗東市景観計画」と名づけられました。この委員会でも、多忙なか時間を惜しまず現場（地域）に飛び込む大学教授や、女性ならではの視点で「目から鱗」の考え方や発想の気づきを与えてくれたアーティストなど、担当を担いながら多くの刺激と学びを得ることができました。こうした出会いに背中を押され、自分自身が地域に飛び出していくことの意義を知りました。更には、社会人大学院で得た知見や情報のおかげで、地域に飛び出したときの説得力が増し、地域課題に向き合うための引き出しも増えたのだと思っています。そして、自らが目指すべきビジョンとして、百年かけて風格都市を目指すために誇りと愛着を育む「景観」を切り口としたまちづくり活動に取り組むことになりました。

## 「公務員のプロボノ活動」の始まり

「景観」を切り口にしたまちづくりは、「栗東市街道百年ファンクラブ（以下、街道百年FC）」をベースに様々な活動を展開しています。この街道百年FCは、国の助成事業をきっかけに組織した協議会の実働組織として立ち上げました。街道百年FCには、大学教授、建築士、工務店、まちづくりコンサルタント、アートNPO、地域住民など、多岐にわたる分野から、それぞれにミッションをもった仲間たちが集いました。そして、この仲間たちとともに自分たちがやりたいことを楽しみながら実践に移していききました。それでは、想いをもった仲間たちがなぜ集まってきたのか。自分なりに仲間たちの想いに応えるために意識してきたこと、あるいは自分自身の役割を整理すると、第一に、自治体職員ならではの地域住民との接点を活かして地域まちづくりという「活動の場」をつくること。第二に、活動資金や地域まちづくりに関する情報の収集や発信を行うこと。第三に、仲間たちの熱意に負けないぐらいの熱い想いをもち、地域住民や仲間の輪を拡げるために「心に火をつけること」だと思っています。

最初は「景観」を通じたまちづくり活動であることから、公務（パブリック）の職務として活動し始めましたが、仲間たちの献身的な姿勢に触発され、また公務を超えて個人（プライベート）的にやってみたい

ことを実践するため、個人としての活動が増えていきました。こうした活動を重ねるなかで「公務員のプロボノ活動」の意義が明確化していきました。

「公務員のプロボノ活動」とは—— Wikipediaでは「プロボノ (Pro bono) とは、各分野の専門家が、職業上もっている知識・スキルや経験を活かして社会貢献するボランティア活動全般」とあります。私なりの解釈として「公務員のプロボノ活動」とは、これからの住民自治や地域主権社会に向けて、自治体職員としての知識・スキルや経験などを活かし、住民と自治体職員の目指すべき関係を築き、住民自治の発展に向けた社会貢献活動だと考えています。

地方分権や地域主権の必要性が叫ばれる今日、こうした「公務員のプロボノ活動」は益々、必要になるのではないのでしょうか。目指すべき社会を構築するという崇高な目的意識もさることながら、自分たちがやりたい活動を楽しみながら展開し、尚且つ、住民の方から感謝されたり信頼されたりする。多くの方から感謝されたり信頼されたりする。多くの前向きな人たちとのネットワークが拡がり、公務（パブリック）にも活かすことができる。「公務員のプロボノ活動」はボランティア活動ですが、それ以上に得るものも大きいといえます。

一方、個人（プライベート）での活動とはいえ、いくら普段着を着てみても、住民から見れば自治体職員には相違ありません。「公務員のプロボノ活動」においても、これ

まちづくりのメンバーによる夏合宿では、ワークショップで紙芝居「観音寺ものがたり」をつくりました



をしつかりと認識しながら公私混同をできる限り避けることが求められます。公平性や公正性の観点からも、一定の地域に深く関わることに對するリスクマネジメントも必要となるでしょう。

しかし、個人（プライベート）での活動と公共（パブリック）な活動とを自分のなかで常に整理し、変な誤解さえ招かないように配慮すれば、それほど難しいことでもないと考えています。小さなリス

2007年から始まった「東海道ほっこりまつり」は、5000人以上の人出でにぎわいます



クを意識し過ぎて防御線を張らずに、一度思い切って飛び出してみるべきです。そうすれば、リスク以上に得られるものは大きいはず。自治体職員がもつ法律や制度、まちづくり事例などの情報力や、地域課題と人材をマッチングさせるネットワーク力、更には現状の社会問題に對する問題意識や正義感など、活動の場である「地域」には、自治体職員が貢献できることは少なくありません。

なお、「景観」を切り口にしたまちづくり活動は、景観や風景だけに注目したまちづくり活動ではありません。「景観」を出発点にしつつも、人口減少、交通、地域活性化、地域文化など、活動する場である「地域」には多岐にわたる課題が複雑に絡み合っています。これらを地域住民とともに学びながら、仲間たちの総合力で解決を目指し活動しています。

### おもな活動紹介

#### ■東海道ほっこりまつり

このまつりの舞台である東海道は、歴史街道の雰囲気や漂う地域固有の資源でしたが、慢性渋滞による通過交通の増加により、ただの危険な道となっていました。この東海道を、「一日だけでもゆつくりと楽しんでみたい」という住民の言葉に、住民と自治体職員の心がひとつとなり、交通・景観の社会実験として「東海道ほっこりまつり」を開催しました。このとき初の試みでもあった

ため、住民とともに手探りで企画・検討を進めるなかで、協働のまちづくりをごく自然な形で実践することができました。

#### ■ぜさいや物語プロジェクト

江戸時代の薬屋・旧和中散本舗（国重文）の屋号看板は、かつて盗難被害に遭い、数日後、発見されたものの再犯防止や文化財保護の観点から博物館に収蔵されていた。このため、旧和中散本舗を訪れる人たちには屋号もわからない状況にあったため、地域住民が提案した「せめてレプリカの看板だけでもつくりたいか」という想いに、賛同する街道百年FCがレプリカ看板を作製しました。このプロジェクトでは、有志の募金を集め材料費を調達し、プロジェクトを牽引する工務店からの提案で、住民の想いを込めるために1000人の市民が参加する「千人彫り」で作製しました。

#### ■観音寺集落まるごと里山学校

「観音寺集落まるごと里山学校」では、様々な手作り企画を、街道百年FCが主導して準備作業を進めました。見晴らし台PJ（プロジェクト）では、地元間伐材を活用して地元住民と街道百年FCメンバーが中心となり、見晴らし台を手づくりで作製。観音寺ものがたりPJでは、来訪者に地元の歴史や想いを伝えるため地元女性陣のヒアリングをもとに紙芝居をプロデュース。このほか、里山学校の企画全般を街道

百年FCのネットワークを活かして、多彩な事業を展開しました。

■ A+Plus (エイプラス)

安養寺地区で進める景観まちづくりを通じて、まちづくりに熱意のあるメンバーで立ち上げたA+Plusは、「住み親しんだまち、みんなでプラスに」を合言葉に、地元住民、デザイナー、市議会議員、建築士、カフェオーナー、自治体職員など、様々な分野からメンバーが集っています。かつては市の中心地としてにぎわっていた安養寺地区を盛り上げるため、花と緑によるコミュニティガーデン活動や、まちづくりを学び



職員まちづくり研究会「くりつく」で作製したポスター

ながら進めるガイドブックPJ、仲間の輪を拡げる安養寺山清掃登山、BBQ(バーベキュー)など、メンバーが楽しみながら特技を活かした活動を展開しています。

■ 職員まちづくり研究会「くりつく」

「景観」を切り口に様々なまちづくり活動を展開するなかで、より多くの仲間が必要となります。その一方で、まちづくり活動自体が職員としてのスキルアップやネットワーク拡大につながり、関わる職員の人生をも豊かにする。そう確信するなかで、まちづくり勉強会の開催を呼びかけました。勉強会では数回のワークショップを通じて参加型で議論し、具体的な行動計画を話し合いました。その結果、第一に、様々な分野の職務を共有するためメンバーが持ちまわりで話題提供する。第二に、市のあるべき方向性を話し合いながらチームとしての職員提案を行う。第三に、実際にまちづくり活動の現場に入り気概のある職員の姿を行動で示す。以上のような目的意識をもって毎月、勤務時間外の活動として夜な夜な集まっています。

最後に

こうして振り返ってみると、想いをもって取組んだ仕事(パブリック)の延長線上に、個人(プライベート)の領域で「公務員のプロボノ活動」として行動を起したことを通じて、自分自身が大きく成長できたと思

います。具体的な行動を通じて、尊敬できる学識者や先輩、想いを共有できる仲間にめぐり合えたことが何よりの財産になっています。ガメツイ程に資格を意識した頃よりも、むしろ、こうした仲間の絆(ネットワーク)が構築できたことのほうが大切な財産であり自信につながりました。「類は友を呼ぶ」といいますが、自分自身が熱意をもっていれば共振する仲間もきつと現れます。そして、個人的な関心・趣味のような感覚で行動していれば、活動自体が楽しくなり「笑う門には福来る」で仲間の輪は拡がるでしょう。

この足跡は、ブランド・ハプンスタンス(計画された偶発性)理論に合致することが多いのではないのでしょうか。「幸運」は偶然に起こるのではなく、前向きな気持ちがあつたから訪れたのかもしれない。常にポジティブな姿勢で前向きに取組んできたから多くの仲間たちに出会い、その仲間たちのおかげで活動の幅が拡がり、多くのプロジェクトを実現することができました。こうした活動を通じて住民の方から感謝された顔を合わせて笑顔になれたりといったネットワークが確実に増えました。これこそが自治体職員になった原点のように感じます。これからも、「公務員のプロボノ活動」を通じて、わがまちが少しでもプラスになるように活動していければと思っています。